

ヨーロッパみてある記

- 西洋きのご事情 -
(その7)

瀧澤 南海雄

ドイツ国立林業林産試験場

11月29日

7時起床。朝食を食べて、8時15分に中央駅へ行き、3番ホームから21番の電車に乗る。9時15分にベルゲドルフ駅に着いた。パウフ博士との約束から15分も遅刻している。急いでロッカーへ荷物を入れ、博士に電話した。私の電話を受けた女性が暫く博士を探した後に繋いでくれたのだが、電話が遠くて、「パウフ、パウフ」と言う声がかすかに聞こえてきた。(ドイツでは電話で名をなめる時は、名前のみを言うようだ。決して「ジスイズ パウフ」などという言い方をせずに、「パウフ」とか「ザドラブル」などと簡潔に言うのみであった。)

「遅れて申し訳ありません。瀧澤です」と言うと、「ベルゲドルフとは反対側の出口にいなさい。10分で迎えに行くから」とおっしゃる。そこで指定された側の出口で待っていると、ほどなく一台の車が駅の階段下に止まり、ライトを点滅した。それが博士の車だった。博士は、「研究所から空港まで車で送るから荷物をロッカーから出してくるように」とおっしゃるので、遠慮なくロッカーから荷物を出して博士の車のトランクに収める。

試験場に着くと、博士の実験室に案内され、そこでこちらの訪問意図を改めて説明した。博士は、「午後からそれぞれの専門家(木材腐朽菌の研究者とリグニン生分解の研究者)とディスカッションできるように手配してみる」と約束して下さり、次いで国立林業林産試験場の業務内容を説明して下さいました。



写真1 パウフ博士(右側)

博士のお話によると、国立林業林産試験場は世界林業および森林生態学研究所、森林遺伝学および林木育種研究所、経営研究所、木材生物学および木材保存研究所、木材化学および木材化学技術研究所、木材物理学および木材機械加工技術研究所、の6部門から成っている。そしてこれらの部門は独立して研究を進める一方で、互いに密接な関連を保ち、林木の品種改良、林木育成のための栄養学、林木育成時のストレスの影響、伐採原木の品質保持、製材後の品質管理、加工法、加工製品の品質保持・向上などに関わることを総合的に研究している。さらにハンブルグ大学とも強い結び付きを持っており、博士は大学の教授を兼務しておられる。もちろん試験場と大学間でも必要に応じてプロジェクトを組むなど、自由度の高い研究体制を取っているとのこと。さらに大学の学生や大学院生が試験場で研究テーマを持って学ぶことも日常的に行われている。博士の言によると、大学との関係は、人的資源上のメリッ

トだけでなく、試験場と大学の2本立の予算が使えるので、予算上でもメリットを生むとのことであった。

博士のお話の後、大学院生の案内で施設を見学した。施設そのものは北海道立林産試験場と大きく異なるところはないが、先に述べたように機構上研修生をおいたり、大学と密接な連携をとっているところは大いに異なっている。

私たちが見学している間に、パウフ博士は腐朽菌の部門やリグニンの生分解の部門の研究者と私たちが面談できるように手を早くしてくださったが、残念なことにリグニンの生分解部門の研究者は他のミーティングがあって面会不可能とのことであった。

お昼には、博士が中華料理店へ招待してくださいました。このあたりでは13時から昼食をとるのが普通ということで、12時というのに店内は閑散としている。食事中、博士は日本を訪ねた時の思い出を、それも日本料理に関する数々の思い出を、本当に楽しげに話してくださいました。

博士は2時から学生への講義を予定されておられたので、昼食の後試験場へ戻ってすぐ、博士から林木の育成から利用に至るまでの総合プロジェクト研究の報告書や、いくつかの文献を頂戴してお別れした。

午後2時から、腐朽菌部門のシュミット博士とお互いのデータを基にシイタケ栽培についてディスカッションをしたが、博士の意見としては、現在ヨーロッパで行われているような開放系の培養法を用いると雑菌汚染から逃れられないので、閉鎖系の培養法を用いるべきである、培地に加える栄養分としては、種菌（穀類の種子を培地としたもの）を5%混ぜるだけで十分とのことであった。いずれにせよ、キノコ培地に殺菌剤を用いることは絶対に避けるべきである、と言う点でお互いの意見が一致した。

この後、博士の現在の研究テーマである、ナミダタケの交配実験や、それに伴うアイソザイムパターンなどを説明していただいた。ナミダタケは4週間晴所で培養し、その後3週間実験室内に放



写真2 シュミット博士(左側)

直すると簡単に子実体を形成するので、孢子を採取することは非常に容易だ、とのことであった。いろいろ話しているうちに、試験場の運転手さんが私を空港まで送る時間だ、と言って迎えに来たので、シュミット博士とお別れして試験場を後にした。

ロンドンへ

運転手さんは、まず山川さんを街で降ろし、次いで私を空港に降ろして帰っていった。いよいよロンドンへの独り旅の始まりである。KLMのカウンターで、キャンセルしたハンプルグ アムステルダムの航空料金を払い戻してくれるか、と尋ねたら、旅行会社を通じて手続きをしる、と言う。不親切だ。

チェックインし、非課税店でワインとお菓子を土産に買う。日本から持ち出したカラーフィルムが切れたので5本買ったところ、100マルク（およそ1万円）もとられてびっくり。海外ではフィルム何ぞを買うものではない。

17時離陸。この飛行機にはすこぶる付きの美人スチュワーデスが乗っていた。どれくらい綺麗かという、彼女の体の回りには後光がさして、彼女が微笑むと、その光がきらきらと飛び散り、回りがパーと明るくなるほどなのだ。何よりも、彼女が現在の仕事を心から楽しんでいることが、傍目にも分かるのが素敵である。見ている人をそれだけで幸せな気分にしてしまうような美人が世の中には居るものなのだナー、と感嘆しつ

つ、しばし見とれた。

ロンドン時間17時30分に着陸（時差は1時間であるから飛行時間は1時間30分）。入国審査で失敗をしてしまった。旅行者が2列に並んでいたの、何も考えずに一方の列の最後尾についたのだが、その列はEC加盟国の国籍を持つ者だけが並ぶ所だったのだ。自分の番に来たときに係官に指摘されて、やっと間違いに気付いた。それでも係官は列を換えなくてもよい、と言いながら入国審査を始めてくれたのだが、そのしつこさは相当なものだった。何の目的で来たのか、何日滞在するのか、初めての訪英か、滞在先の住所は、そこには誰が住んでいるのか、いつから住んでいるのか、帰りの切符は持っているか、ドイツに住んでいるのか、（日本に住んでいると答えると）日本への切符はあるのか……等々。およそありとあらゆることを聞いてくる。しかも彼の喋る英語が聞き取りにくい。余り抑揚をつけず、口の中でもごもご言う感じなのだ。初めての訪英か、と言う質問が聞き取れずに2回はど聞き直したところ、何と彼は「ハジメテデスカー」と妙なアクセントの日本語で問い掛けてきた。

やっとのことで放免されて外へ出ると、義弟の敬一君が出迎えてくれた。案内された駐車場には運転手付きの白いベンツが待っている。会社で契約しているタクシーとのことだが、日本の商社はやることがどうも派手だ。30分程走って一家の住む借家に着いた。

早速晩ご飯となったが、ヨーロッパ旅行中の私のために、鮪と鰯の刺身、大根とイカの煮付け、散らし寿司、日本酒などで歓待してくれる。ところが意外だったのは、折角の和食なのに感激が薄かったことである。これはどうも次の理由によるものらしい。私はこの旅行に出発するに当たって、その土地の食事を食べることがその土地の文化の根幹に触れることなのだから、できる限りその土地の食べ物を食べることに、少なくとも和食店なんぞには逃げ込まないこと、と覚悟を決めていたために、ここで喜んでしまっただけは折角の覚悟が萎んでしまうのでは無いか、との心理的なプレー

キが自動的にかかってしまったようなのだ。

しかし、久し振りの顔合わせである。四方山話しを肴に日本酒、スコッチウイスキーと次々に酒がはかどるうち、いつしか床の上で眠りこけてしまった。

ロンドン郊外の住宅街点景

11月30日

7時30分起床。朝食後、敬一君は会社、長男の康平は小学校へ。10時から、次男、三男に留守番をさせて、妹と私は自転車でデパートへ行く。妹たちの借家のある地域はロンドンの中心街からは車で30分ばかりの住宅街である。自転車で走りながら観察すると、ロンドンの住宅街は通りごとに家のデザインが統一されている。通りを全体として見ると綺麗だが、半面個々の家は没个性的となってしまう。そのためだろろうと思われるのだが、入り口のドアだけはそれぞれ自由な色に塗られているのだ。ところが、その色使いが凄まじく、赤、舌、黄色のような原色を平気で使っているの、品格という点から見るとおおいに欠けたものがあることが惜しまれる。

訪ねたデパートは、郊外のものとしては大変に立派な建物であった。食料品売り場も品数が豊富で活気に満ちている。ラップに包んだ蟹があったので手にとって見ようとしたら、黒人女性の売り子に「ドント タッチ！」と叱られてしまった。

野菜売り場には、シャンピニオンとシイタケとヒラタケが並んでいて、特にシャンピニオンは傘が開き、日本で売られているものの4～5倍の大



写真3 ロンドン郊外の住宅街



写真4 巨大なシャンピニオン

きさに育ったものも売られていた。これはヒダの上に詰め物をして料理するための商品であるそうだ。鮮やかな色の野菜があるな、と思って近付くと、赤、緑、黄色のピーマンがそれぞれ山を成しているのであった。

細長いソーセージ、ブラッドソーセージ（昨年、ドイツの農家で経験話を話してやったので、ぜひ食べてみたいと、妹が言ったのである）などを食料品売り場で買い、他の売り場でキノコ図鑑などを購入。一度家へ帰って小包を作り、改めて出直して郵便局へ行く。郵便局は雑貨屋の一隅に位置を占めており、局員も一人の小さな出張所である。若い男性局員は親切で、いろいろ手続きを説明してくれるのだが、なかなか聞き取れない。どうもロンドンっ子の英語は発音が分かりにくいのだ。それでもなんとか用を足し、約5,000円の運賃を払って表に出た。

次に魚屋を訪ねたが、ここにも豊富な商品が並んでいた。おかしかったのは秋刀魚にSAMMAと名札が着いていたことである。日本語名がそのまま英語名になっている。これは日本人が秋刀魚を食べる習慣をイギリスに持ち込んだことを如実に示すものだ。何気なく上を見上げて仰天してしまった。壁際の天井からヤマドリが20羽程ぶら下がっていたのだ。魚屋で野鳥を売るとは予想もしないことであった。夕食用に赤い金目鯛に似た魚を買って店を出る。

歩く途中、小さな八百屋の前を通りかかったので覗くと、やけに細い大根や、萎れたオクラが並

んでいた。イギリスでは、例え野菜の鮮度が落ちても値段を下げて売ることはしないそうである。仕入れ値に対して余り掛け値をしないので、値下げができないのだろうか。それとも、ただ融通が利かないのであろうか。

次に韓国人が経営する食料品店があったので、これも覗いてみた。棚にはハウスカレー、インスタント味噌汁「あさげ」、インスタントラーメン「出前一丁」、キッコマン醤油、ハウス練りわさび、海苔、乾シイタケなど、数々の日本商品が並んでいて、先程の八百屋とはちがって立派な大根も置いてあった。また、カルフォルニア産らしい米が売られていて、袋にはNISHIKIの文字が印刷されている。この店の商品を見る限り、対象とする客は主として日本人のようである。それだけ多くの日本人がこの辺りに住んでいるということだろう。

家に戻り、鱗が硬くて手に負えない、と言う妹に代わって金目鯛モドキを捌く。鱗が硬いだけでなく、包丁が切れないので苦労した。8時すぎに敬一君が帰って酒盛り。デパートで買ったブラッドソーセージは、予想したとおり、腹が立つほどまずかった。

ロンドン中心街点景

12月1日

7時起床。10時から妹一家と自家用車でロンドンの中心街へ。ハイドパーク、バッキンガム宮殿、大英博物館、などを通り過ぎる。ビッグベン



写真5 二階だてのバス、左が観光用

の国会議事堂はスモッグを落とす工事が終了して真っ白く生まれ変わっていたが、現在工事中のビルは真っ黒に汚れていて、ロンドンのスモッグの酷さがよく分かった。途中男女がカップルとなった騎馬警官が路上をパトロールしているのを見かけた。敬一君によると、「時々、馬になりたいと思うほどいい女の警官がいるんですよ」と言うことだが、女性警官の姿が男性警官の陰になって、よく見えなかったのが残念。また、有名な二階建てのバスもひっきりなしに走っている。市内観光用のものは二階部分の屋根を取り、回りの風景が見やすいようにしてあった。

買い物がある妹をデパート前で降ろし、残りはセントポール教会へ行く。日本ではチャールズとダイアナが結婚式を上げたことでつとに有名であるが、伽藍が大きいことでは世界で有数の教会である。ここで失敗をしてしまった。神父の一人が近づいてきて、帽子を取れ、と身振りと言う。教会の中では帽子を取ることがエチケットであることを、田舎者の私はすっかり忘れていたのだ。オー、アイアムソーリー。ファーザー。

教会の内部はさすがに大きく、豪華で、パイプオルガンも大型のもの2台が向き合っている。ステンドグラスを張り巡らしたドームも素晴らしい規模である。しかし、興冷めだったのは、ホールに土産物の売店が相当な面積を占めていたことと、通路のあちこちに「教会の維持のため、少なくとも1ポンドの寄付をして欲しい」との立て札が立っていたことである。確かにこれだけの教会



写真6 セントポール教会の内部

1992年9月号



写真7 路上で売られていたキノコたち

を維持するのは大変だろうが、神の下僕のものとして、余りにもあからさま過ぎるのではないかと、思ったのだ。

拝観を終わって、妹と合流するためにデパートへ戻ったが、駐車場で手間取り、約束の時間を25分も遅れて約束の場所へ着いた。このため妹とははぐれてしまい、それっきり会えずにロンドンを離れることになってしまった。ところで駐車場からデパートへ向かう途中、比較的細いアーケード通りの人込みを歩いていると、何処からか「軽くうどんでも食べに行きませんか」なんぞという日本語が聞こえてきた。「ロンドンくんだりまでやって来て、何もうどんを食うことも無いだろう」と内心思ったのだが、当方も昼食は腹を空かせた甥っ子たちとハンバーガーをパクつく羽目になった。歩行者天国になっている裏通りでハンバーガーを立ち食いしたのだが、その通りには出店があり、衣料品、日用品などの他、野菜も売られていた。何気なく覗いたところ、シャンピニオン、シイタケ、ヒラタケが並んでいた。ただし、鮮度は低く、特にヒラタケはほとんど原形をとどめぬほど型崩れしている。売り子に「シイタケは何処で生産されたか」と聞くと、「フランスとイギリス」と答えた。なるほどシイタケには2種類あって、フランス産の方が肉厚であった。

ロンドンからアムステルダムへ

13時30分に街を離れ、ヒースロー空港まで送ってもらい、敬一君と3人の甥っ子と別れた。

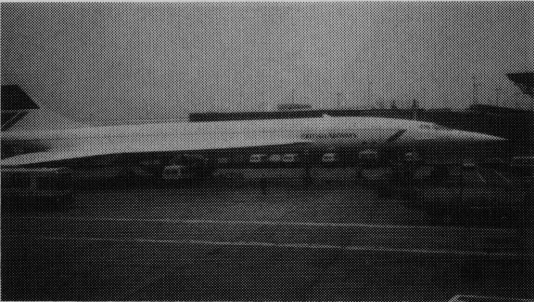


写真8 超音速旅客機コンコルド

さて、空港の税関での荷物検査は腹が立つほど徹底していた。スーツケースはもちろん、女性のハンドバッグも全部開けられ、中のもの全てを引っ張り出して検査する。本もページをバラバラとめくって検査(いったい何を探しているのやら)、電子手帳もスイッチを入れてみる、と渡される。爆弾ではないことを証明しろ、という訳だ。スウェーデンでボート夫人から頂いた紙の小箱(中にはトナカイの置物が入っている)も改めて個別に線検査にかける。ともかくやるのが細かくて時間がかかるのだ。私の前に並んでいたご婦人は、検査を終わったバッグを一つ返してもらったのだが、係官が別のバッグを「これは誰のものだ」という風に無言で差し上げると、体は半身に構えたまま、うんざりした顔だけを係官に向け、「そうよ、それも私のものだよ。それがどうしたっていうのよ」という風に、これも無言で大きく2~3回うなずいてみせていた。

やっと放免されて待ち合い室に入れたが、入国審査といい、出国時の手荷物検査といい、イギリスは全く融通が利かない国であった。飛行機に塔乗し、窓から横を見ると、あのコンコルドが隣に止まっていて、訳もなく感激する。13時12分離陸。42分後にアムステルダム空港に着陸。

中年おじんのホモと間違われる

空港から列車でアムステルダム駅へ移動。駅からは歩いてホテルへ。フロントで「日本から来た瀧澤だ」と告げるが、フロント嬢は宿泊名簿に名前が載っていないと言う。そこで、「ミスター山

川は着いているか」と尋ねると、「イエス」と答える。そこで「私はミスター山川と同室である」と告げると、理解はしたものの、あきれ顔である。挙げ句の果てに裏へ回って同僚に「信じられないわ」と言う声が聞こえた。何のことはない、私と山川さんはホモだと勘違いされたのだ。西洋人は仲の良い友達でも、男同志が同室で寝ることはしないので、それを平気でやる日本人はホモに違いないと思われるようである。なるほど、若くハンサムな男同志ならともかく、くたびれた小父さん同志のホモは、若い女性ならずとも気持ち悪く「信じられない」ことではあろう。私だって気持ち悪いよ。

フロントで教えられた2073号室のチャイムを鳴らすと、山川さんが顔を出した。無事ドイツからの列車旅行をこなし、安着していたのだ。もし、山川さんが途中行方不明にでもなっていたら、このホテルに泊まれないところであったのだから、一安心である。

早速入浴と洗濯。山川さんが列車で一緒になった医者夫婦から、アムステルダムは危険だから22時以降は出歩かないほうが賢明だ、と忠告されたと言うので、部屋で飲むことにする。冷蔵庫から缶ビールを取り出して一口含んだところ、妙な味がする。何だ、こりゃー！ とラベルを確かめたところ、アルコール分0.5%と書いてある。ビールではない。ビールモドキであった。しょうがないのでウォッカを混ぜてはみたものの、馬のしょんべんもかくや、と思われる味であった。次いでハイネッケンがあったので、一缶ずつ胃に収める。

ベッドに入ったが、胸焼けがして寝付けぬ。ビールモドキのせいらしい。窓の外は相当に喧しい。酔っ払いが大声を上げつつ歩し、喧嘩らしき騒ぎが続く。午前4時になってもまだ騒いでいる。その内、とどめの一発として大きな爆発音が鳴り響いた。花火なのか銃なのかは不明だが、迷惑せんばんなことである。一晩中まんじりとませず、うつらうつらしたと思ったら、もう7時になってしまっていた。

(林産試験場 微生物利用科)